学級崩壊はどうして起こるか

１．学級崩壊は、どうしておこるか？

学力の低い子どもが、問題行動を起こす。⇒これだけでは、学級崩壊は、起らない。
↓
学力の高い子どもが、同調したり、あおったり、参加したりする。
↓
学級崩壊

２．どうして、学力の高い子どもが、同調したり、あおったり、参加したりするのか？

〇授業が面白くない。わかりきった内容の授業である。
〇塾などですでに学習済みの内容の授業である。
〇授業を通して子どもは、担任が、馬鹿に見えている。塾の先生の方が、立派である。
〇塾の先生の方が、わかる授業をしてくれるし、新しい知識も獲得できる。

＋

〇担任の指導に一貫性がない。説得力に欠ける。
〇担任の指導が、的外れである。
〇担任を冷めた目で見る。←「ほめて育てる」「ほめ言葉のシャワー」の誤解による指導
↓
担任を舐めてしまう。

学校では、適当に力を抜いて遊んでいればいい。 先生をだますぐらいは、簡単である。

３．学級崩壊が起らないようにするためには、

①学級経営の問題
- 指導の的確さと一貫性。
- しっかり叱って、しっかりほめる。←「ほめて育てる」
  子どもの人格否定をしないように気を付ける。
- 差別を許さない学級づくり
- 一人ひとりの存在感のある学級づくり（学級の中に居場所がある。）

②学力の低い子どもの問題
- 繰り返し学習⇒学力の向上
- 学力が低くても困らない人間関係（友達関係）づくり

③授業づくりの問題
- 学力の高い子も低い子も１時間の授業の中で新しいものを獲得するような「楽しい授業」の構築

授業で子どもは、先生を尊敬する。

先生と子どもの距離について

先生と子どもの距離は、近い方がいいと考えがちであるが、どうもそうではないようである。近すぎると、子どもは、先生の言うことを聞かなくなったりするし、遠すぎると、子どもの状況がわからず、「いじめ」が起こったりする。適切な距離を保つことが大切である。

怖い先生、怒る先生は、あまりそんなことを考える必要はない。そういう先生に対しては、子どもたちは、いうことを聞くし、先生の指示も徹底する。上から威圧的におさえれば、学級崩壊の可能性は少ない。頭ごなしに悪いことは悪いと怒り、そのあと、普段は、いつもあなたのことは見ているんだよという姿勢を示せば、言うことを聞く。一緒に遊んだりして少しのやさしさを示し、子どもとの人間関係をつくっておけば問題はない。子どもたちは、「怖いけど、優しい先生」という表現をする。しかし、怖くない、怒らない先生が、次に担任すると、言うことを聞かなくなったり、学級崩壊につながったりする。それでは、学年が上がる毎に怖さを増していかなければならなくなる。それは、よくない。そこで、ひとつの提案！「子どもとの距離」を考えてみてはどうだろうか。

○低学年の場合

（ケースその１）

- 子どもの使う言葉を使って話をする。「いらん」「まじ」「あほか」「うるせえ」
- 授業中の指名に名前やあだ名で呼ぶ。「かおりちゃん」「ブースケ」
- 子どもの意見に子どもの言葉で返す。「そうやなあ」「あかんで」
- 子どもとまったく同じように遊ぶ。

↓

子どもは、先生を自分と同じ友だちのような感覚で見てしまう。　近すぎる。

↓

先生の指示が通らなくなり、言うことを聞かなくなる。 → 崩壊につながる。

（ケースその２）

- 指示を多く出し、考えさせることをあまりしない。
- 命令調で、子ども目線ではなく、上から威圧的に話をする。
- 禁止事項が多い。躾と称して、管理教育をする。
- 問題が起これば、理由も話さず、頭ごなしに怒る。
- 全体が、同じ行動をとることを好む。

遠すぎる。

↓

先生は、怖い人、怒られる、怒られないようにしようと思うようになる。

↓

陰でいたずらをしたり、いじめが起こったり、うそをついたりするようになる。

○高学年の場合

子どもは、授業で、先生を見ている。「ああ、そうだったのか」「なるほど」「わかった」などの感想を持つことができる授業を構築することが大切である。そうすれば、子どもは、自然に先生を「尊敬」する。尊敬できる先生なら、いくら子どもに近づいても子どもは、自分との距離を適切に保つことができる。また、高学年においては、子どもとの距離を離しすぎると、子どもとの意思の疎通ができなくなり、いろいろな問題が、起こってくる。

（ケースその３）

- 「わかりきった内容の授業」「作業的な授業」「おもしろくない授業」などをする。
- 命令調で、子ども目線ではなく、上から威圧的に話をする。
- 禁止事項が多い。躾と称して、管理教育をする。
- 全体が、同じ行動をとることを好む。

↓

子どもが先生を馬鹿にする。

↓

先生の指示が通らなくなり、言うことを聞かなくなる。 → 崩壊につながる。

※このようになったとき、教師が、子どもと話をしたり、遊んだりして、子どもに近づかなければいけないと思い、そういう行動をとるのは、逆効果になる場合がある。

こんなことが起こったらどうするか。

１．言葉遣い

- 教師の教養と品のある言葉遣いで、子どもと先生の言語環境を整える。

２．子どもとのいい人間関係

- 躾と称して、管理教育をしない。子どもの人格を認めていく。

３．いい授業

- 授業内容を充実させ、授業で子どもが尊敬できるような先生になる。

４．説得力

- 問題行動を起こしたときは、問題をちゃんと理解させ、その上でどのように修復するかを考えさせ、どうするかという結論を自分で決めさせる。

↓

先生とそれぞれの子どもとの適切な距離を保とう。

いつも同じ距離ではない。
TPO によって、異なる。

（参考）

○　言葉遣い

１．子どもの普段使っている言葉遣い
２．常体
３．敬体
４．指示・命令　　を使い分ける。

○　視線・目の高さ

１．子どもの目の高さより上から
２．子どもと同じ目の高さ
３．子どもの目の高さより下から　　を使い分ける。

○　指導机

１．子どもの席の前に置く。
２．教室の一番うしろに置く。
３．教室の出入り口のところに置く。

○　児童机

１．前向き２人１組
２．前向き個別
３．班（４～６人）
４．コの字型

まとめ

１．いい授業をして尊敬される先生になる。

２．人権・生命に関わる問題は、厳しく指導する。
　　それ以外は、子どもに結論を出させる。

３．言葉遣いに気をつけ、言語環境を整え、子どもとの適切な距離を保つ。

４．まじめな子どもが、得をする学級を作る。

５．子どもに本音をぶつける。

６．子どもをほめるときは、本当のことでほめる。